おんがく広場 第71号
Facebook,Twitterにも掲載／リンクフリー／御自由にコピーして下さい　令和2年(2020)4月10日創刊
令和2年(2020) 7月27日(月)
発行・クッキー会　発行責任者・加藤良一
連絡先　rkato@max.hi-ho.ne.jp

「厚生音楽資料全集 ―戦時期の音楽文化」刊行にあたり

戸ノ下 達也

戦時期日本の文化には、西洋化・近代化への指向と共に、総力戦体制構築のための人々への啓発宣伝、意識昂揚、教化動員を目的とした諸相が見られます。音楽も、好むと好まざるとに関わらず、総力戦体制構築の役割を担うこととなりました。

戦時下の娯楽政策

特に、1941 年 12 月 13 日に情報局が発表した「戦時下国民娯楽ニ対スル緊急措置ニ関スル件」では、「音楽、映画、演劇、演芸等ノ国民文化乃至国民娯楽ニ対シテモ出来得ル限ル限リ之ヲ抑圧スルガ如キ方途ヲ避ケ進ンデ積極的指導ヲ加ヘ（中略）雄大ニシテ健全、明朗ニシテ清醇ナル娯楽ヲ與フル」と明記されていたように、政府は、娯楽政策を推進するため音楽を始めとする文化領域を重要な鍵として捉えていました。

その娯楽政策の取組みのひとつが、ドイツのクラフト・ドゥルヒ・フロイデなどの余暇運動をモデルとして推進された厚生運動や、大政翼賛会が主導した翼賛文化運動などの文化運動です。厚生運動は、東京市や大阪市などの行政が推進する体操やスポーツ、ハイキングなどが実施されましたが、大日本産業報国会も、成立と同時に音楽や演劇などによる厚生運動を事業のひとつとして推進しました。

このように日中戦争期に始った文化運動は、アジア・太平洋戦争期になると「健全娯楽」推進の重要な手段として、職場や地方にも拡大していきます。音楽でも、オーケストラの地方巡回、指定歌曲を巡回指導する国民皆唱運動、演奏家協会音楽挺身隊の歌唱指導といった、移動文化運動などが展開されました。それは戦時期特有の、啓発宣伝や教化動員を目的とした取組みだったが故の限界の一方で、戦後に継続する文化の裾野の広がりという正負両面から評価すべき課題と思われます。そして同時にこれらの文化運動が戦時期に限定されたものではなく、戦時期から現在に至る日常の中でどのように息づいているのか、歴史に即して再考し、考えてみる必要があるのではないでしょうか。

復刻音楽資料を体系的に解説

これら、音楽による文化運動の理論や演奏・指導形態の解説として、アジア・太平洋戦争期には書籍やリーフレット類が出版されていました。これらの史料は、今日ではなかなか目にすることが出来ませんが、当時の時代相を如実に物語る一次史料と言えるでしょう。今回復刻する『厚生音楽全集』第 1～5 巻(新興音樂出版社、1942-1944 年)は、厚生音楽とは何か、どのように実践するのかを体系的に解説したものです。

そしてこの時期の移動文化運動としての音楽の実像を考察する史料として、ビクターやコロムビアが社内に設けた厚生音楽研究会が発行したパンフレット、移動文化運動の担い手だった清水脩や石井賢次郎の著作を別巻として補完します。さらに総目次・解題・論文集を付け加え、音楽による文化運動を再考します。

この復刻が、戦時期の社会や文化の実像を捉え直し、二度と同じ過ちを繰り返さないために、私が当時を想像し、受け止め、考え、次代に伝える試金石となればと願っています。

――――――【編集部より】――――――

戸ノ下達也さんは、現在日本大学文理学部人文科学研究所研究員、洋楽文化史研究会会長を務め、近現代日本音楽史研究をライフワークとされています。また、今年度より、日本音楽著作権協会JASRAC理事、全日本合唱連盟監事にも就任され、音楽文化に関して幅広く活躍されています。

著書に『「国民歌」を唱和した時代』、『音楽を動員せよ』、『戦時下音楽界の再編統合』、編著に『日本の吹奏楽史』、共編著に『日本の合唱史』、『総力戦と音楽文化』など多数の著作を手掛けています。

今回、『**厚生音楽全集－戦時期の音楽文化**』復刻版として全7巻・別巻の第1回配本が、7月31日より発売されます。

第1回配本は『厚生音楽全集』第1巻(1942)と第6巻の附録資料編。第6巻には『厚生音楽と体育を語る』、『職場と音楽』、『戦時下の生産能率と音楽』、『職場と音楽』、『職場に音楽を採り入れる方法』などが所収されています。